鶴見俊輔：ひとりの保守主義者

土　倉　莞　爾

目　　次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　鶴見俊輔の「岩床」
Ⅲ　「戦後」が失ったもの
Ⅳ　もう１人の保守主義者
Ⅴ　おわりに

Ⅰ　はじめに

鶴見俊輔とは何か。本稿では鶴見の思想における保守的なスタイルに焦点を当ててみたい。考察は次のような手順でおこなわれる。

Ⅱ鶴見俊輔の「岩床」では，政治学者中島岳志の「鶴見俊輔の岩床」論を起点として，鶴見俊輔をひとりの保守主義者として理解する理由を考察して行く。

Ⅲ「戦後」が失ったものでは，吉田満の名著『戦艦大和の最期』をめぐって，鶴見と吉田の対談を中心に論じる。

Ⅳもう１人の保守主義者では，鶴見が好評価する丸山眞男「陸羯南――人と思想」（1947）論文をメインにして，丸山と鶴見の対話を考える。

Ⅱ　鶴見俊輔の「岩床」

政治学者中島岳志は，鶴見俊輔の岩床について，次のように語り始める。なかなかの名文である。少し長くなるが，引用してみよう。

中島によれば，鶴見が評価する人物は一貫した「岩床」を持った人物である。人はどうしても時代に左右されやすく，変化に迎合する。23歳で終戦を迎えた

鶴見は，戦中と戦後で発言や態度を一変させる人間を多く目の当たりにし，嫌悪した。彼は小賢しい人間を横目で見ながら，変わらぬ岩床を持つ人間に敬意を寄せた。鶴見にとって「自分の古さを自覚し，岩床を探ろうとする」人間こそ，真の保守主義者だった。本当の保守は，時代に阿らない。変えることのできない価値に信頼を寄せ，庶民の集合的経験知を重視する。一時の断片的熱狂に冷水をかけ，極端なものを嫌う。そのような一貫した態度こそ，保守の真髄である（中島 2015，284；同 2018，241）。

中島の引用を続ける。中島によれば，鶴見は「日本人の精神的伝統としての「岩床」を「自発的な非国家神道」に求める。その特色は，「『思想？フーン，そんなもの』という思想嫌い」にあり，「思想を重く見ないという思想」こそが，日本的伝統の岩床だという（同 2015，284；同 2018，242）。

そして，中島は，鶴見の次のような発言を引照する。そのまま，引用しておこう。「たとえば，国体明徴とか目をつり上げないで，『人柄がいいなら，マルクス主義者でも何でもいいじゃないか』というようにして，助けてくれる人がいるでしょう。夢野久作はまさにそうなんですね。彼の秘書は共産党なんだ。自分は玄洋社の系統なのに，まったく平気でいる。あれが非国家神道だと思いますね」（鶴見 2015，179；中島 2015，284-5；同 2018，242）。

中島は言う。鶴見は，土着世界の精神に依拠した夢野久作を高く評価した。夢野は玄洋社の反功利主義的側面に強い愛着を持ち，憧憬の念を示しているが，この精神にこそ鶴見が抱きしめた「岩床」がある。エリートの「一番病」に厳しいまなざしを向け続けた鶴見の哲学がここに集約されている（中島 2015，285；同 2018，243）。

鶴見は戦後日本の左派陣営の中にあって，一貫して合理主義的な「進歩」を疑った人物である，と中島は言う。中島によれば，進歩を掲げる人間には，自らの能力に対する過信が潜んでいる。「一番病」の驕りが付着している。この傲慢な姿勢に，根源的な疑義を呈さなければならない。それが鶴見の生涯をかけたテーゼだった（同 2018，246-7）。

鶴見は，司馬遼太郎との対談で次のように言う。

鶴見　15年間もあんな戦争をやったんだから，水野広徳的な反戦思想が用意されていなければならないはずだし，それが日本が国家として，国民として寄りかかるに足る思想の河床＝岩床だと思いますね。（中略）いまわれわれが日本人としてなすべきことは，15年間の戦争をやらせた力に歯止めをかけるという，現実把握なんです。それをなしうる岩床を探すことが第１で，資本主義がいいか，社会主義がいいかなんていう問題以前の問題ですよ。

司馬　その岩床を探すというのはたいへんなことだな。岩床を探さねば，日本の政治的正義というのがくりかえしうわすべりしてゆくということになりますね。

鶴見　（前略）自分はどういう気持ちで15年間戦争をしてきたのか，自分がまちがえたときの期待の次元をもう一度自分のなかで復刻し，それを保守すべきだったのに，そのときに，占領軍の威を着て，嵩にかかってまちがった戦争だった，わかりきっていたことだと回顧の次元だけで，あの戦争を見たでしょう。あれがまずいんですね。その期待の次元から手を放さなかったという意味で，丸山眞男氏はえらかったと思います。丸山さんは馬に乗せたキツネにならなかったわけで，そういうものを全部洗い流して，彼も進歩的文化人のなかに入れてしまうのはまちがいです。また，逆のタイプの人で，吉田満氏をえらいと思う。戦争が終わって呆然としているなかで，彼は戦争中に自分に植えつけられた文体（文語文）で，戦艦大和が沈められて自分が漂流しているときに，自分のなかを行き交じった心象をそのまま定着した。期待の次元での戦争像から手を放さないでいた。（中略）わたしが子どもだったときに綺羅星のごとく並んでいた進歩的評論家，学者は，清沢洌や宮本百合子，広津和郎とか，ほんの数人の例外を除いては，ほとんど“鬼畜米英”の旗を振っていたでしょう。その人たちの動きをキチッとかきとめたいと思った（鶴見 2015，166-8）。

さて，吉田満については節をあらためて検討することにして，次に粕谷一希の鶴見批判について議論を進めて行きたい。すなわち，鶴見は左翼知識人・進歩的文化人というレッテルを張られ，通俗的な理解の中で批判されてきた。こ

こでは，中央公論社の元編集長だった粕谷一希の「戦後史の争点について――鶴見俊輔氏への手紙」（粕谷，1978）と，鶴見の「戦後の次の時代が見失ったもの――粕谷一希氏に答える」（鶴見，1979）をもとにして考えてみよう。

ところで，筆者（土倉）が粕谷の鶴見批判について示唆を受けたのが，政治学者中島岳志の言説であった。とりあえず，まず，その中島が言及する粕谷・鶴見論争を紹介するところから始めて行きたい。

中島によれば，粕谷は次のように言う。「鶴見さんは日本の保守派が，政府と国家を同一視しがちなことに危惧を持たれていますが，保守派は日本の進歩派が，政府や体制を否定することで，トータルな国家否定にいたることを危惧しているのです」（中島 2015，258）。

これに対して，鶴見は次のように答えている。「民族の自己同一性をうしなわずに，敗戦と敗戦後の状況をどのように生きるか，という問題が，日本の戦後思想の重大な問題となってきました。この場合，日本民族の自己同一性が，そのまま，日本国家の自己同一性ではないということ（両者は関連はありますが），それをつよく主張したいのです。さらに，日本民族の自己同一性は，そのまま現政府の自己同一性ではないということもはっきりおぼえておきたいことです。その区別の中に，日本国家批判，日本政府批判の根拠があります」（同，259）。

中島は言う。鶴見にとって，「民族の自己同一性」は「村の思想」にあった。無名の庶民たちが紡いできた経験知の蓄積こそ，民族のアイデンティティーだった。その豊饒な世界を分断し，価値の転換を迫る存在こそ近代国家だった。鶴見は功利主義と一体化した現代国家を，庶民＝市民の立場から批判したのである（同）。

中島によれば，鶴見は次のように述べる。私（鶴見）は，保守主義者を重んじたいと思っています。（中略）その保守主義が，みずからのうたがいをもっていることを，つよく希望したいのです。保守主義が，みずからの現在の思想にたいしてうたがいをもち，そのうたがいが自分のうしろだてとなっている国家に及ぶような保守的懐疑主義としての機能を何らかの仕方で保つことを希望

します。そうであれば，保守的であるということが，そのまま，国家批判の権利を放棄することにならず，まして，現政府のきめた政策をそのままいつも支持するという立場をとることとかならずしもつながらなくなります。戦争中から戦後をとおって今にいたるまで，私が，こだわっているのは，保守主義がそのまま国家批判の権利の放棄につらなるあり方です（同，260；鶴見 2015，245）。

このようにして，中島は，鶴見の言説を引用した後に，以下において，鶴見の強調する「保守的懐疑主義」を熱烈に擁護する。

すなわち，中島によれば，鶴見が強調する「保守的懐疑主義」は，保守思想の中核にある観念である。保守は人間の完成可能性を疑っている。あらゆる人間は無謬の存在ではない。倫理的にも知的にも限界を持って生きている。そんな不完全な人間は，不完全な社会しか構築できない。過去・現在・未来のいずれの時間においても，人間は不完全な世界の中で生きざるを得ない。保守の人間観・世界観は，完成への積極的諦念を基礎として成り立っている（261）。

少し，横道にそれるが，中島は，鶴見に対する弔辞を，『共同通信』（2015年７月配信）に書いている。一部分だけ紹介したい。

「鶴見俊輔さんの訃報に接した時，全身から力が抜け，虚脱感に襲われた。鶴見さんの存在は，私にとってあまりにも大きかった。鶴見さんは，時に進歩的文化人の代表と見なされる。しかし，彼ほど『進歩』という概念を厳しく懐疑した人はいない」（263）。

「長い冷戦が続く中，鶴見さんはアメリカとソ連の両方を疑った。確かに両国は資本主義と社会主義というイデオロギー面で対立している。しかし，『進歩の幻想』にしがみついている点では同じである。そして，ほかならぬ戦後日本も同じ罠にはまっている。この病理をいかにすれば乗り越えられるかが，鶴見さんの問いだった」（同）。

「鶴見さんは，進歩幻想の背景にあるエリートの『一番病』を指摘し続けた。進歩を疑わない人には，自らの能力に対する過信がある。人間の力によって，完成された未来を切り開けるという思い上がりがある。『正しい答え』を所有できると思い込んでいる。結果，彼らは時の権威者に追随し，自己を失ってい

く」（同）。

さて，粕谷一希の鶴見批判，あるいは，粕谷・鶴見論争の地点までようやくたどり着いた。

まず，1978年に書かれた粕谷一希の「戦後史の争点について―鶴見俊輔氏への手紙」（粕谷，1978）を紹介しよう。粕谷はこう切り出す。

『諸君』８月号に掲載された吉田満氏との対談＜「戦後」が失ったもの＞を拝読しました。この対談自体，吉田満氏の「戦後日本に欠落したもの」（『中央公論経営問題』，1978年春季号）――それは私（粕谷）の編集者としての最後の仕事になりましたが――を受けた形でなされており，鶴見さんがそれをどう批評されるか，私としてもきわめて興味深かったためであります。省みれば，私の編集者生活の最初の仕事のひとつは，『中央公論』に連載された「日本の地下水」という，鶴見さんと武田清子，関根弘氏と共同の，サークル誌評を担当することでした。またその後，中央公論社版の『思想の科学』編集を３年間，お手伝いすることで，一面ではある種の違和感を感じつつも，じつに多くのことを学びました（同，218）。

あれから20年近い歳月が経ちました。（中略）編集者という立場の拘束から解放されて自由になったいま，『諸君』編集部から何か書いてみないか，という御好意を受けたとき，最初の仕事として，鶴見さんの胸を借りて，戦後日本の歩みについて，私なりの感想をまとめてみることを思い立ちました（219）。

異論を正面に捉えながら自説を展開される数少ない例外として鶴見さんは存在しています。私もまた敬意をこめて公開形式の手紙という形で，いささか鶴見さんへの異論を展開してみたいと思います（同）。

じつは，ここ数年来，私の念頭にもある空しさと危惧が去来していました。それを結論的にいってしまえば，次のような疑念です。――敗戦によって日本は生れ変ったはずだった。単純化すれば，戦後の歩みは，明治以降の“富国強兵”路線を捨てて，“富国”の道を歩んできた。けれども路線の違いこそあれ，日本人の体質はあまり変っていなかったのではないか。かつての日本が“列強に伍して”軍事大国を実現したとき，すでに破局への萌芽を宿していたように

“世界の先進国に伍して”経済大国を実現したとき，それ自体稀有な能力の証明なのでしょうが，新しい破局の萌芽をすでに宿しているのではないか。かつて日本人は軍人の独走を許したように，戦後の日本人も経済人の独走を許してしまった。そのことに関し，世界認識と存在の在り方に責任をもつべき知識人は，またもや自らの無力を証明してしまったのではないか。（中略）――ということです（220-1）。

私たち多少下の世代から眺めていますと，戦後の論理には，“醤油を飲んで徴兵を逃れた”，いってみれば醤油組の天下といった風潮がありました。『きけわだつみのこえ』の編集方針も，意識的に反戦的学生の声だけが集められました。愚劣な戦争に駆り出されて無駄な死を強制された。だから２度とこうした戦争を起こさせてはならない。もう『僕らは御免だ』，ドイツの戦没学生の手記も訳されて，戦後の反戦感情・反戦運動は盛り上げられてゆきました。それは半面では正当に思われました。けれども微妙なところで，何かエゴイズムの正当化といった作為的な思考のスリカエがあるように思われて，当時から私にはなじめなかったことを記憶しています（224）。

敗戦の８月15日，『近代文学』の同人のひとりの方は，「腹の底から笑いがこみ上げてきた」そうです。その感情に嘘偽りあるとも思いませんし，その世代の批判的グループの実感として，それ自体を非難する気は毛頭ありません。軍国主義による15年戦争の終り，それからの解放という意味で喜びに価いする日であったでしょう。（中略）しかし８月15日は他面においてやはり日本国家の敗亡として，民族としての悲しみだったのです（226-7）。

鶴見さん御自身は，進歩思想の中に身をおきながら，全く異なった発想と行動様式を取られた方ですが，戦争中にすでに戦争の結末を見通され，戦争遂行に懐疑的であった点では，義務としての死を覚悟して積極的に戦闘に参加していった吉田満氏とは，かなり戦争体験の感じ方が違うと思われます（227）。

８月15日の事態が，無条件降伏による敗亡の悲しみと，戦争終結と軍国主義支配からの解放の喜びという両義性をもっていたように，占領という事態もまた，幸か不幸か，民主化・近代化の推進者という意味で，占領軍は占領者であ

ると共に解放者でもありました。このことが日本人の国民としての自立性・主体性をどれだけ阻害してきたことか。占領状態が終わったのちもながく，自らの判断と能力で自立決定する機会をもつことができず，また自らの手で抑制しあるいは開放することの困難さを実感できないで来てしまいました（228）。

戦後日本の保守体制は「私」の論理の拡張のなかで節度と抑制を失い，日本人を納得させる公共性を獲得しているとは思えません。同時に，革新陣営もまた社会主義の論理と運動のなかで挫折し，日本人を納得させる公共性を形成していません。私には戦後の日本人は，自らのものとしての国家を公共の場として，まだつくりえていないように思えます（233）。

戦後日本の進歩思想が到達した最終的理念は“市民”の観念であったように思われます（233）。60年安保に結集したエネルギーが去っていったとき，革新陣営は直線的な中央突破をあきらめて，“農村が都市を包囲する”命題に学んで，生活に密着した自治体攻略を考え，革新自治体を次々に成立させながら“市民主義の論理”を深化させて行きました（234）。

鶴見さんは日本の保守派が，政府と国家を同一視しがちなことに危惧をもたれていますが，保守派は日本の進歩派が，政府や体制を否定することで，トータルな国家否定にいたることを危惧しているのです（235-6）。

保守も進歩も，なんらの幻想をもてなくなったいま，国民の強調が危険を招くのか，市民の強調が甘えを招くのか，行きがかり上のアクセントの違いはあっても，ファナティックな相手の否定は，サメた若い世代の共感を得られないでしょう（237）。

私見では，粕谷の議論は，「市民」対「国民」の対抗図式にこだわりすぎるように思われる。そして，「国民」→「政府」→「国家」の連続線も気になるところである。

さて，粕谷への返答である，鶴見の「戦後の次の時代が見失ったもの――粕谷一希氏に答える」（鶴見，1979）論文の検討を以下において試みたい。ただし，この鶴見言説は，すでに中島をとおして一部分紹介している。その部分は重複を避けるため省略する。

鶴見は次のように述べる。中央公論社から雑誌『思想の科学』が出版されたころの編集者として，一緒に仕事したころの粕谷さんについて私のおぼえているところでは，その後，変わっておられないとすれば，政治的な保守主義者であったように思います（鶴見 2015，245）。

鶴見は続ける。戦争中から戦後をとおって今にいたるまで，私がこだわっているのは，保守主義がそのまま国家批判の権利の放棄につらなるありかたです。理論的には別の保守主義がありうる，しかし現実にはそういう別の保守主義が日本でつよくそだたなかったし，その成立の社会的基礎そのものが薄いという認識です。そうだとすれば，その欠落をうめるために，保守主義以外の思想の潮流が代行することを認める。この認識がおそらく，粕谷さんと私とを分かつものであろうと思います。私が，吉田満氏の著作をはじめて読んでからこの人にたいして敬意をもちつづけながら，日本の現在についての診断として書かれた「戦後日本に欠落したもの」に，いくばくかの不満をもったのは，戦争把握の深さにもかかわらず，なおも国家批判の権利を保つところがはっきりしないということを感じたからです（同，245-6）。

鶴見は，次のようにも粕谷に反論する。以下，鶴見の文をそのまま引用する。粕谷さんの論文によると，保守派が進歩派のトータルな国家否定におびえているということですが，その現状把握には，私は疑問をもちます。むしろ，進歩派は，とくに1960年代の高度成長に入ってから，よりよく管理されることを要求することで，自治を忘れさる方向に進んでいるように思え，その故に，保守派・進歩派もろともに，国家権力によってさらに完全に管理される立場になだれこんでいるように私には思えます（同，251）。

粕谷さんの文章と私の文章との両方に，石橋湛山についての言及があり，この人は，私たちが共通に敬意をもって対する人のようですが，この人は，明治末期の文芸評論以来，小さい，しかし生活の質のすぐれた日本という未来像を保ちつづけて，第１次世界大戦中の成金時代の日本に対し，また満州事変以後の軍国日本に対した人でした。石橋湛山のような道すじを歩く評論家になってほしいと，私は，粕谷さんに望みます。『思想の科学』の中央公論社版創刊の

ころに協力した時代だけが，私と粕谷さんとのつきあいのすべてなので私にとっては，信頼できる人としての記憶が今も生きています。今後の御努力を望みます（252-3）。

私見を挿めば，石橋湛山を語るとき，そこに鶴見の保守主義者の側面が表れているように思える。別の言い方をすれば，近代化一辺倒の進歩主義ではなく，古風な調和のとれた保守主義の風貌が浮かび上がってくると言ったらよいのだろうか。

さて，1978年に書かれた粕谷の「戦後史の争点について―鶴見俊輔氏への手紙」（粕谷，1978）は，同年，『諸君』８月号に掲載された吉田満と鶴見俊輔の対談「『戦後』が失ったもの」（吉田・鶴見，1978）に触発されたものであった。そして，この吉田・鶴見対談は，吉田が「戦後日本に欠落したもの」（吉田，1978）という問題提起を受けて実現されたものであった。したがって，吉田言説を先に検討すべきであるが，吉田の言説については，節をあらためて論じたいという行論の経緯から，まず，最初に，吉田満と鶴見俊輔の対談を，紹介・検討することにしたい。対談は次のようにして始まる。

鶴見　おそらく吉田さんの論文には，日本人の抑止力のなさ，というか，ブレーキが利かなくなる特性に対する憂慮があるような気がするんですね。その点については私も同感なんです。ただ，吉田さんの論旨と私の論旨が違ってくるのはそれから先で，吉田さんが「アイデンティティーを失った」とおっしゃるときのアイデンティティーという言葉，その受け取りかたが私はちょっと違うんだな。（中略）吉田さんの場合は，民族のなかでの自分個人の依りどころという，エリクソン問題意識が受けとめられていないような気がするんですよ。むしろ，ちょっと横すべりしてしまって，国家としての同一性という地点に早く持ってゆきすぎているように思われるわけです。（中略）問題は，日本人が，個人としての自分らしさを失ってしまっている点だと思うんです。たとえば，私がメキシコで会った中国人の学者が，（中略）「日本人は個人としてどんなによくっても，集団になった場合は信頼できない」と。これは日本人につての妥当な意見だと思うんです。集団として攻め

こむとか，残虐行為をするときに，ひとり「俺はやらない」と横をむいてじっとしている，あるいは人を抑えることのできる日本人の個人というのはきわめて稀です。（後略）。

吉田　たしかに，自分で考えてみましても，自分の個としてのアイデンティティーの内容がとても空虚であるという実感が，強くありますね。とくにわれわれ世代の戦争前から戦争中にかけての状態を考えると，自分自身の個としての内容がいかに空虚であったかを痛感したもので，そのことをだいぶ書いたつもりです。（中略）その場合，いつも思うのは，いわゆる戦前派の世代ですね。戦前派の世代は，われわれよりもっと自分を確立できる時間的な余裕が，時代的にあったはずだと思うんです。ところが，そういう世代が戦争中に何をしたか，そして戦後に何をしたかを考えますと，どうもわれわれ以上に自分の個の内容を充実させているとは思えない。そんな気がしてなりません。（後略）。

鶴見　特攻経験といいますと，ちょうど私より１，２年上のところではバタバタッと死んでいるんだけれど，われわれの世代だと，わりあいに少数で，それも志願した連中なんですね。（中略）彼らは間違っていたと思うけれど，その間違いに対する敬意をもっています。（中略）「わだつみの会」の仲間で，反戦運動をやっている人ですが，靖国神社の大祭には必ず行くんです。誰が何と言ったって行く。そこはもう無言の行為なんだ。

吉田　その時志願した連中の動機は純粋だったと思うんですが，最近になってはっきりしてきたことは，最後に彼らが実に絶望的だったというか，苦しんだということですね。（中略）純粋な気持ちで，本来なら戦争で死ぬはずはない奴が間違って志願し，またそういう働きかけをして，それでいて，いよいよ最後になった時にあれほど虚しかった，彼ら自身が虚しさを直感したということは，二重に痛ましいですね。

鶴見　たしかに個の内容の充実というか，生きる愉しみを自分で持つ，自足の人になることは重大なことでね。立身出世とか，他人の出世に対する妬み心とかにまったく関係なく平然としている人が，たいへん少なくなった感じで

すが，これがこわい。そういう人が，もう一度出てこないと，ブレーキのきく社会というのはできないと思うな。

吉田　しかし，日本の地理的な条件や資源の不足，人口の問題などを考えると，激しい競争社会たらざるを得ないということは事実なので，そのなかでおっしゃるような自足の生き方を貫くことは，なかなかむつかしい。そういう生き方が合わせて生れてくれば理想的なのでしょうが……。

鶴見　私のおやじの世代というのは，たいへんに立身出世主義的で，追いつけ追い越せという感じの人たちだったと思うんですが，その上の世代の人たちのことを考えると意外に落ち着いている。たとえば，若槻禮次郎さんのことを思い出すんですが，戦後，彼を訪ねたことがあるんです。褌いっちょうの裸のまま玄関に出てきて，部屋に入ってから浴衣に着替えましてね。いまはだれも訪ねてくれないから，時世を憤慨する漢詩を書きつづけるという．その漢詩の反古を部屋中に貼ってあるんですね。しかし，わりあい平気で耐えている。わたし，とても好感をもった。

鶴見　明治38年（1905）の日露戦争を負けないで切り抜けたときに，日本の国家の指導者に大きな転換があったような気がするんです。（中略）何だかんだ言われてますが，あのときに，児玉源太郎と小村寿太郎は，ナポレオンもヒトラーもできなかったことを成しとげたんです。ナポレオンもヒトラーも，ロシアに向けてワァーッと攻め込んだが，途中でブレーキがきかなくなって大負けに負けて帰ってきた。ところが，児玉，小村は２人で組んでうまくやった。（中略）指導者側があれだけの抑止力を働かせることができ，また，国民の側でも，（中略）とにかく自分を抑えることができた。あの相互の抑止力のきかせかたというものは，すばらしいものだと思うんです。（中略）名誉や利益についての欲望に抑えがきかなくなり，そういう指導者の姿勢が大正時代の青島出兵につながっていく。昭和の初めになるともう無茶苦茶で，理性的に考えたら負けるに決まっている戦争まで敢行してしまう。（後略）。

吉田　昭和30年（1955）代から40年代にかけての日本経済の高度成長は，戦争に勝った状態と同じですね。ドイツは日本より先に経済成長をしたけれど，

ギリギリのところでブレーキをかけていた。日本の場合は，かなり痛い目にあわないとブレーキがかからない。その後さまざまなショックで痛い目にあって，いま，ようやく少し反省するようになったというところでしょう。

吉田　鶴見さんがアメリカから帰られたのは戦争中ですか。

鶴見　ええ，昭和17年（1942）の交換船です。15歳から19歳まで向こうにいました。

吉田　そういう若い年齢で，ああいった歴史の頂点で両方の国をごらんになったということは，非常に得難い経験でしょうね。帰国されてみて，やはり日本という国は異常でしたか。

鶴見　おそろしかったですね。わたしたちの上の上の世代には，批判すべきときにはするという信頼できる人がいたんですが，わたしの同世代とすぐ上の世代はだいたい批判がなかったですからね。

吉田　よりおそろしいのは，戦後，自分が戦争中こういう考えで行動し，発言した，しかし，この点はまちがっていたのでその点を反省し，いま，あらためてこういうことを言うんだという，その種の発言がほとんどないことですね。

鶴見　同感です。ただ，わたしは戦争中に生じた信頼感というのは残ると思うんですね。たとえばわたしは，吉田茂という人は好きなんです。（中略）それから，同様な基準で言えば，戦争中から信頼できると思った人に，石橋湛山がいます。

吉田　吉田茂，石橋湛山，お二人とも確かに立派なかただと思います。しかし，大部分の人はそう立派にはできないし，またそれでしかたがないと思うのですが，それなら戦後になって，自分は戦時中誤った，それはどういう誤りであったか，いまどの点をあらためているか，それをはっきり言ってくれないと困る。そういう発言のないことが，現在，日本人の抑止力をよわめている大きな要素ではないかと思うんです。

鶴見　結局のところ，敗戦直後の戦争責任の追及の問題が，右翼と左翼の区別の問題にすりかえられてしまった。共産党が中心となって戦争犯罪の追及を

したでしょう。そのとき，戦後，自分たちの戦列にもどってきた人は追及しないようにしたんですね。そこが問題だと思うんです。共産党に反対する人がだれかを知ることと，戦争責任を追及する運動とが同じになってしまいますからね。ですから，『アカハタ』に載った戦犯の人のなかには，吉屋信子などという人もいるし，反面，鬼畜米英に近い発言をした人でも共産党にもどってきた人は追及されないことになる。（中略）もちろん，日本の支配者層も，自分たちが戦争協力した事実を隠すことによって，占領軍がとりしまるのにまかせて，なんとか逃げようとした。だけど同時に革新勢力の側も，自分のグループ，党派に入っているかいないかで決めようとした。だから，その戦争責任を明らかにするという課題は担い手を失って宙に浮いてしまったんですね。

鶴見　日本の国家目標が，戦後すぐマッカーサーによって与えられたものであるにせよ，昭和27年の時点で，それらをもう一度日本人が主体的に腑分けして考え直す必要があった。（中略）共産党の場合，それが可能だったはずなのに，あまり立ち入らずにすぎてしまった。右翼の場合も，腑分けをすべきであったのに，占領批判をした右翼はひじょうに少ない。その意味でわたしは，当時占領批判をつづけた右翼――たとえば葦津珍彦などは神社の問題などで占領軍と渡り合っているが――本格的だと思う。そういう右翼は，しかし，15年の戦争のあいだに少なくなり，結局は政府のおこぼれにあずかるような存在に変質してしまった。葦津珍彦などは，戦争中から戦争批判をし，占領時代には占領批判をすという一個の右翼思想家です。こうした伝統はきわめて少ない。自由主義者でも林達夫など少数に限られています。

吉田　鶴見さん，アメリカという社会は，いま話し合ったような点ではどうですか。過去の発言に対する責任のとりかたというのは。

鶴見　全体として言えば，無節操な部分もありますけれど，アメリカには，日本にはない保守主義というものがあるでしょう。ベトナム戦争についても，保守的な理由から反対する声がつよい力をもちました。保守的な立場からの平和思想，反戦思想というのがありうるわけですね。その伝統の有無が日本

との違いでしょうね。日本でその流派を探すとなれば，しいていえば幕末の田中正造にまで行き着く。庄屋として，六角家の領主と衝突する様子を見ていると，領主が若殿の結婚のために御殿を新築しようとして税金を多くとろうとする。それに対する反対闘争なんだけれども，田中正造はこの村の昔からのしきたりを領主が守ってくれなければ困ると言っているんです。（中略）田中正造の流儀から，たとえば，青島出兵に反対して，日本が欲ばりすぎている，むしろ中国人がめざめて自主的になるのは助けるべきではないかという保守主義がありうるわけです。そうした発想が大正時代から起こっておれば，流れも変わっていたのでしょうけれど，日本では保守主義の流れはたいへんに薄かったと言わざるをえない。

吉田　明治以降の日本の歴史がある意味でひじょうに急ぎすぎたために，そうした基礎的なものの育つ時間がなかったんでしょうか。

鶴見　そうですね。熊本戦争のときの谷干城とか，陸羯南とかはそういう流れに属していた。戦後すぐ，丸山眞男が「陸羯南論」を書くでしょう。あれは，戦後の進歩思想に対する不信を表明したわけで，その着眼は実によかった。ただ，（中略）個を生かす場は何かということを考えるときに，戦後の学者たちがそうしたように，それをヨーロッパやアメリカに求めるのは，筋違いという気がします。（中略）私はむしろ，日本人が自分の個を確立する場として，明治以前からの日本の村の伝統のほうが，はるかに重要だという気がします。

鶴見　村は，戦後，ひじょうに評判がわるくなっちゃって，村的何々とか，全部わるいものになってしまった。しかし，実際に世界のさまざまな村と比較してみると，日本の村は，水利の慣行を初め寄り合って決めるということが非常に多い。（後略）。

鶴見　日本では宗教をあるていどの飾りとして受け入れることの飾りとして受け入れることのできた村の思想が明治以後崩れていって，しまいには万邦無比の「国体」思想になってしまった。それは，かたちは日本古来のものだけれど，中身はキリスト教，十字軍の戦争と同じです。これがおそろしい。そ

の万邦無比の国体を朝鮮，台湾からはじめてアジア各地に輸出しはじめた。むしろわたしは，明治維新のよき伝統，その民族文化のアイデンティティーをとりもどすことが重要だと思いますね。自分の力を知って，もう少し明治以前の宗教的な伝統のいい部分を自分のなかにとりもどしていく，それで個人が生きるんです。

鶴見　わたしは，個人のよって立つ民族の伝統というものがまずあって，その次に国家の問題が来ると思う。そしてその次に政府が来るわけだけれども，日本では国というと，今の政府というふうに短絡して，いまの政府を無条件で支持するところまで行ってしまう。（後略）。

鶴見　日本という国の将来のアイデンティティーについて言えば，もし，アメリカ流の平和国家の目標が日本に根づいたとするならば，たとえば，自衛隊のなかにも，自分の信念に反する命令を拒否することはとうぜんのそこが権利だと思う人たちが出て来るでしょうし，習俗によってその信念を日本の文化は守るでしょう。そういう状態が出てきたときに初めて平和国家の目標が根づいたと言えるんですが，いまは戦争に負けたときに平和国家になった，ならされたということが既成事実としてつづいているのであって，自発的とは言えない。そこが困る。明治以前の村の文化と戦後の国家規模における平和思想とが，ある方法で連続したときに初めて，われわれはもっと安定したかたちをもつと思います。（中略）それは工業化を捨てるのではなくて，工業化を統御できるような理想で，そういう国になって初めて，別のアジア諸国とももっと活発に，信頼にもとづいて交流できるかたちになるのではないか。それには，今年１年とか来年の，という目標ではなくて，すごく長い時間がかかるでしょうね（吉田・鶴見 2015，191-217）。

以上で，長い鶴見・吉田対談からの引用は終えることにしたい。ひとつだけ，コメントすれば，鶴見の「明治以前の村の文化と戦後の国家規模における平和思想の連続」はユートピアのような気がしてならない。それは，現在の言葉で表現すれば，グローバル化する資本主義とリベラルデモクラシーの矛盾といったものではないだろうか？　その意味で，鶴見の構想は「甘い！」と言いたい

ものがあるが，そうは言っても，知識人とは大甘なのであり，鶴見こそ，大知識人というべきであると信じている。

Ⅲ 「戦後」が失ったもの

吉田満のことを鶴見俊輔は次のように回想する。

はじめ，ラジオで読む声が入ってきた。

力衰ヘ，力盡キントシ，生ヘノワガ執着ヲ試ミルカニ，アルカナキカヲサ迷フ生身ノ半バヲワガ執着ヲ試ミルカニ，アルカナキカヲサ迷フ生身ノ半バヲ波ニ奪ワレ，死力ヲ盡シテコノ身ト戦フ（中略）己レト戦ツテ生キンカ，己レニ挫ケテ散リ果テンカ（鶴見 2002，127）。鶴見は続ける。

文体は戦前の小学生にも入っている漢文で，私（鶴見）にも入っている。明治の少年，夏目漱石，正岡子規ならば，もっと本格の漢文くずしが，普通に書く文章だった。私たち戦前の小学生には自分の日常の文体とは言えないが，しかしこの漢文くずしは耳に入ってはっきりしたかたちをつくる。豊後水道にさまよう一個の青年として，意識にもどってきたのは，この漢文体だ。そして最後に，救出の後に自分にもどってくる言葉も，

ワレ果シテ己レノ分ヲ盡セシカ　分ニ立ツテ死ニ直面シタルカ

すでに敗戦後数年たっていて，戦後日本の文体になれた私を，この文章は，思いかけずに出会った前時代人の墓石のように，私をそのまえにたたずませる力をもっていた（同，127-8）。

片道燃料だけを積んで軍艦大和が出港したあと，士官室に，戦前日本になかった自由の言論の場があらわれた。何故われわれは，出撃するのか。この問題にひとつの解答をあたえたのは，学徒兵ではなく，兵学校出身の士官だった。

敗レテ目覚メル，ソレ以外ニドウシテ日本ガ救ワレルカ　俺タチハソノ先導ニナルノダ　日本ノ新生ニサキガケテ散ル　マサニ本望ヂヤナイカ

生き残った吉田満は，戦後，この士官の家をたずね，どのようにしてこの人があらわれたかを記す（吉田，1973）。敗戦は，いちどきに，吉田満の人格をすげかえるはたらきをもたなかった（鶴見，129-30）。

鶴見は言う。「ワレ果シテ己レノ分ヲ盡セシカ」と，吉田満が海上にひとり浮かびつつ自らに問うたとき，その分とは，日本帝国臣民としての臣道のぶんである。少尉任官後，４カ月，日本帝国臣民としての服従義務と，人間として生まれたものの倫理とのせめぎあいの場に立たされることがない。たとえば海軍陸戦隊将校として，裁判をへずスパイと呼ばれる中国人捕虜を惨殺する命令を受領したことがない。あるいは日本軍艦乗組員として連合国の貨物船と洋上で出合い，これを拿捕して基地にもどり，日本の艦隊を見たという理由で，その貨物船に乗っていた外国人を死刑にする執行を命じられたこともない。効果なしと考えられる特攻作戦を軍艦乗組員として受け入れ，自分なりにその無効を考え抜くのが，彼の戦争参加の極相となった。自分の戦争体験のこの極相を記憶にとどめ，その意味を深めるのが，彼の戦後を生きる道だった。ともに海をただよいつつ，彼を警戒心と，そして憎しみのこもった眼で見る若い水兵を忘れることはない。彼は，17歳の少年兵士渡辺清と対談して，お互いの戦時をくらべる機会をのがさなかった。同時に海軍の作戦部内の頂上までたどって，第２艦隊司令長伊藤整一海軍中将の日本海軍最後の艦隊出撃の決断（1945年４月６日）を，もしも彼が出撃拒否したらをふくめて書いた（同，130-1）。

鶴見は，吉田の著述にそって，こう述べる。すなわち，伊藤整一が終戦の日まで命長らえていれば，その経歴からみて，Ａ級戦犯の１人に指名される恥辱が待ち受けていたことは，確実であったろう。（中略）米内海相が，あらゆる状況を考えつくして，最後の死に場所を与えたひとつの意味も，その点にあったといっていいだろう。しかし，だからといって，伊藤長官が７千名の部下を犠牲にしてまで一身の名誉を守ろうとした，と評する見方があるとすれば，それは酷というものであろう（132）。

そこで，続けて，吉田満の名著『戦艦大和ノ最期』について論じたいのであるが，その前に，この書に対する鶴見の「解説」を紹介したい。本稿は鶴見の思想を解明することが主要なテーマになっているので，鶴見がどのように「解説」するかをフォローすることは大切だと思うからである。鶴見は『戦艦大和の最期』（吉田，2016）の「解説」を次のように書き始める。

吉田満が21歳の海軍少尉として戦艦大和にのりくみ，その撃沈に出会った時，彼を律するものは，漢語に支えられる文語体であった。漂流，そして敗戦をむかえた時，彼はこれまで自分を律してきた文語をぬぎすてることなく，彼の出会った戦闘の中での自分の動きを書きとどめた。（中略）昭和20年（1945）3月29日，「大和」は呉軍港から出撃した。この時から士官室に自由な議論がおこった。それは同時に鉄拳の雨，乱闘の修羅場であったが，そこには，同時代の本土ではすでにながくうしなわれていた，自由な発言の機会があった。この中で，論戦を制したのは，吉田満少尉よりやや若い哨戒長臼淵馨大尉の発言だった。

「進歩ノナイ者ハ決シテ勝タナイ　負ケテ目ザメルコトガ最上ノ道ダ　日本ハ進歩トイウコトヲ軽ンジ過ギタ　私的ナ潔癖ヤ徳義ニコダワッテ，本当ノ進歩ヲ忘レテイタ　敗レテ目覚メル，ソレ以外ニドウシテ日本ガ救ワレルカ　今目覚メズシテイツ救ワレルカ　俺タチハソノ先導ニナルノダ　日本ノ新生ニサキガケテ散ル　マサニ本望ジャナイカ」

彼臼淵大尉ノ持論ニシテ，マタ連日「ガンルーム」ニ沸騰セル死生談義ノ一応ノ結論ナリ敢エテコレニ反駁ヲ加エ得ルモノナシ（吉田 2016，179-82）。

鶴見は言う。臼淵大尉の考えは，どのようにしてつちかわれたものか。敗戦から28年たって，吉田満はこの人の肖像を書いた（吉田，1973）。（中略）吉田満の戦後の著作には，戦艦大和に坐乗した第２艦隊司令長官伊藤整一の伝記もあって，この中で，連合艦隊司令長官豊田副武をふくめて海軍首脳がどのようにしてこの必敗の作戦へとかりたてられていったかをあとづけている（吉田，1977）。吉田満の著作の特色は，あと知恵によってこうしたらよかったというふうに書かないことである。当事者がどのような状況で決断したかを，注意深く再現している。その意味で，敗戦直後ほとんど１日で書かれた『戦艦大和ノ最期』は，この戦争について学生出身の若い海軍士官が何を考えていたかの，その同時代における証言であり，この記録としての位置はゆるがない。文学としてのこの記録の価値は，あとからのつくりものではないこの時代そのものに根をもつ表現力に由来する（吉田 2016，182-4）。

鶴見は，『戦艦大和ノ最期』の「解説」を次のように締めくくる。

大東亜戦争における海軍の戦死者は，将官だけで315名（元帥2，大将5，中将16）は世界の海軍史に例を見ない戦死者の数である（吉田，1977）。この事実に吉田は脱帽するが，彼自身はそこに戦後の4半世紀とどまっていたわけでではない。むしろ，『季刊藝術』の編集人として親しかった，のはじめからおわりまで口語からはなれない戦争体験とひびきあうところまですすみ出た。（中略）戦時には軍事大国日本最大の戦艦大和の乗組員となり，戦後には経済大国日本の司令塔というべき日本銀行の重役となったという吉田満の経歴をその内実によって見たい。最晩期の彼は，日本銀行の歴史を書く役をうけて，それを書くことに情熱をもっていた。あの戦争の時に成人であったものは，ひとりひとりが自分が何をしたかのカードを出さなくてはいけない。どこでまちがったかを考えなおす基礎資料としたい，と彼は言った。（中略）1979年の末，そのころ私（鶴見）はカナダのモントリオールにいて，日本領事館に新聞を読みに行き，彼の死を知った。私たちの世代の最良の人をうしなった，と感じた。彼は，私とおなじ学齢である。私の中にそのまなざしが保たれ，新しい状況のあらわれるのに応じて大切な示唆をあたえつづけることをみずからのために祈る（吉田 2016，185-4）。

一言，鶴見の「解説」の結語にコメントすれば，「みずからのために祈る」とは何という名言なのだろうと思う。それだけで，筆者（土倉）は，鶴見の真髄がわかったような気がしたのである。ところで，筆者は，さきに，「彼（吉田）自身はそこに戦後の4半世紀とどまっていたわけでではない。むしろ，『季刊藝術』の編集人として親しかった古山高麗雄のはじめからおわりまで口語からはなれない戦争体験とひびきあうところまですすみ出た」という鶴見の言葉を引用したが，鶴見が何を言おうとしているのか，率直に言ってよくわからなかった。幸い，古山高麗雄は，講談社文芸文庫版の『戦艦大和ノ最期』の「解説」を鶴見が書いたように，この版の「作家案内」を書いている。そこで，続いて，古山の「作家案内」を以下フォローすることにする。古山はこう書き始める。

吉田満について書くとなると『季刊藝術』の話をしなければならぬ。私はこの雑誌によって吉田と知り合いになったのだし，吉田が戦争と戦争で知り合った人を書いた４つの作品のうち，２つは『季刊藝術』に発表したものなのだから。４つの作品とは，「戦艦大和ノ最期」「臼淵大尉の場合」「祖国と敵国の間」「提督伊藤整一の生涯」である。この４篇のうち，「臼淵大尉の場合」「祖国と敵国の間」の２篇を吉田は『季刊藝術』に発表したのである（古山 1994，189）。

元来，『季刊藝術』は，遠山一行，江藤淳，高階秀爾が創めた雑誌で，古山は実務の担当者だった。遠山，江藤，高階の炯眼のおかげで，『季刊藝術』はしばしば傑れた書き手の喜ぶ舞台となった。吉田満もその一人だった。江藤淳の発言で，吉田満が執筆することとなり，古山は吉田と知り合った（同，190）。

吉田の「戦艦大和ノ最期」は，一応，知られていたが，その評価は，十分とは言えなかった。現在もそうだが，あの大戦争に関することが，偏向やゆがみなしに語られることは少ない。今でも，まず反戦か否かを問う心情が，思考の出発点になっていたりする。そういうものは，もの書く人のある部分を閉じ込めて，文学を痩せたものにするのだが，そういう社会の潮流は，容易に流れを変えることができるものではない（190-2）。

吉田の「戦艦大和ノ最期」は，初め，アメリカの占領政策に縛されていただけでなく，しばらく，この国のアンバランスの中に沈んでいた。しかし，静かに輝いていた。江藤淳には，そういう輝きを鋭敏に見いだす才があり，古山に教えたのであった。古山が吉田を訪ね，執筆を依頼したのは，1973年であった。（中略）吉田は日本銀行に勤めていた。そして，得たのが「臼淵大尉の場合」であった。（中略）「祖国と敵国の間」はその翌年の作品である（192）。

古山は次のように回想を続ける。古山は，あのころ，長い，いい付き合いが始まったのだ。これからゆっくり，いろいろと吉田と語り合うことになるだろう，とのんきに考えていた。ところが，急に逝去され，ゆっくり，いろいろと語り合う機会を失ってしまった。取り残された古山は，吉田の書いたものから，あれこれ考えてみるしかなくなってしまった（192-3）。

戦争中，軍国政府は，“バスに乗りおくれるな”という言葉を国民に流した。

つまりは，戦争協力におくれをとるな，率先または同調しろ，ということである。吉田はあの戦争に対して，はたまた，国のやり方に対して，もちろん，疑問をもっていなかったわけではない。しかし，何であれ，国策に従うのが国民の義務だと思い，幹部候補生の試験に合格して海軍の将校になり，生還の期待の持ちにくい戦場に運ばれた。吉田は，素直に，バスに乗ったのである。海軍将校になったのも，バスに乗ることであり，親への孝でもあった。ところが，古山は，バスに乗るまい，とした人間であった。戦場に運ばれ，反軍，反国策の思いをひそかにいだいたまま，生還した下級兵士である（193-4）。

古山はこう考える。古山のような者は，戦時中は，いわゆる非国民であったのだが，戦後は，むしろ正しかったように言われる。しかし，古山には，自分が正しいなどという意識はまったくない。古山によれば，吉田のような人たちのほうが多かったのだが，古山は，バスに乗った人が間違っていたなどとはみじんも思わないと言う。（中略）古山は，そのことについては，誇りも自責も，ないのである（194）。

古山は次のように結論に向かってゆく。原文をそのまま引用しておきたい。

「吉田さんは立派な方だけれども，今後，私たち下級兵士のところにも降りて来て，物を考えてみる必要があるのではないか。吉田さんに対して，そんな見方をしたこともあった」（198）。

「亡くなられた日から，どれくらい前であったか，吉田さんに会ったことがあり，そのとき吉田さんは，これから，大きな仕事にかかるつもりです，と言った。私は，期待しています，と言ったが，その大きな仕事が，どのような構想であるかをつぶさに伺わないうちに，吉田さんは亡くなった。（中略）。吉田さんの『提督伊藤整一の生涯』につづく，“大きな仕事”は，実現しないまま，吉田さんは他界された」（198-9）。

これで，鶴見の言う「吉田は，古山のはじめからおわりまで口語からはなれない戦争体験とひびきあうところまですすみ出た」ことについて，ある程度解明できたような気がするのだが，続いて古山が指摘する「吉田の『戦艦大和ノ最期』」は，初め，アメリカの占領政策に縛されていただけでなく，しばらく，

この国のアンバランスの中に沈んでいた」という問題について，考えてみたい。すなわち，『戦艦大和ノ最期』の出版事情は，困難で複雑なものがあったことを理解しなければならない。

吉田は，『戦艦大和ノ最期』初版あとがきにおいて次のように述べる。

この作品の初稿は，終戦の直後，ほとんど1日を以て書かれた。執筆の動機は，敗戦という空白によって社会生活の出発点を奪われた私自身の，反省と潜心のために，戦争のもたらしたもっとも生ま生ましい体験を，ありのままに刻みつけてみることにあった。私は戦場に参ずることを強いられたものである。しかも戦争は，学生であった私の生活の全面を破壊し，終戦の廃墟の中に私を取り残していった（吉田 1994，166）。

約3年前，或る特殊の事情のために，本篇は極めて不本意な形で世に出ることを余儀なくされた。今日，それが本来の形で公にされることについて，力を尽くされた多くの方達に対して，心からの感謝を捧げたい（同，167）。

この作品の中に，敵愾心とか，軍人魂とか，日本人の矜恃とかを強調する表現が，少なからず含まれていることは確かである。だが，前にも書いたように，この作品に私は，戦いの中の自分の姿をそのままに描こうとした。ともかくも第1線兵科士官であった私が，この程度の血気に燃えていたからといって，別に不思議はない。我々にとって，戦陣の生活，出撃の体験は，この世の限りの者だったのである。若者が，最後の人生に，何とか生甲斐を見出そうと苦しみ，そこに何ものかを肯定しようとあがくことこそ，むしろ自然ではなかろうか（同）。

ここまで，吉田の「初版あとがき」を読み進めてくると，古山の言う「吉田のが『戦艦大和ノ最期』は，初め，アメリカの占領政策に縛されていただけでなく，しばらく，この国のアンバランスの中に沈んでいた」という問題が想像つくと言ってよいのだが，吉田は吉田なりにはっきり以下のように言っていることに注目したい。

すなわち，吉田によれば，戦没学生の手記などを読むと，はげしい戦争憎悪が専らとりあげられているが，このような編集方針は，一つの先入主にとらわ

れていると思う。戦争を一途に嫌悪し，心の中にこれを否定しつくそうとする者と，戦争に反撥しつつも，生涯の最後の体験である戦闘の中に，些かなりとも意義を見出して死のうと心を砕く者と，この両者に，その苦しみの純度において，悲惨さにおいて，根本的な違いがあるであろうか。（中略）このような昂ぶりをも戦争肯定と非難する人は，それでは我々はどのように振舞うべきであったのかを，教えていただきたい。我々は一人残らず，召集を忌避して，死刑に処せられるべきだったのか。或いは，極めて怠惰な無為な兵士となり，自分の責任を放擲すべきであったのか。――戦争を否定するということは，現実に，どのような行為を意味するのかを教えていただきたい。単なる戦争憎悪は無力であり，むしろ当然すぎて無意味である。誰が，この作品に描かれたような世界を愛好し得よう（167-8）。

吉田は，1974年，『戦艦大和ノ最期』の「決定稿に寄せて（北洋者版）」に，さらに進めて次のように書く。この発言は重要である。

吉田は言う。戦争の中に組み込まれた自分の所業を，正直に表白するという執筆態度は，占領軍の検閲方針に触れて出版は難航をきわめ，出版後も多くの読者から，いたずらに戦争の悪夢をよびさますものとして指弾を受けた。戦時中のわが言動の実態を吐き出すのではなく，逆に戦争にかかわる一切のものを否定し，自分を戦争の被害者，あるいはひそかな反戦家の立場に仕立てることによって，戦争との絶縁をはかろうとする風潮が，戦後の長い期間，われわれの周囲には支配的であった。したがって戦後30年を経たいま，決定稿発刊の気運を見るのは望外のことである以上に，今日の日本の状況がそこまで立ち至ったのかとの感なきをえない。戦艦大和の終焉とそれに殉じた人々の命運は，日本人が残した栄光と転落の象徴としてわれわれの眼前にある（171-2）。

そう述べた吉田は，さらに鶴見の述べた「吉田は，古山の戦争体験とひびきあうところまですすみ出た」点について，あらためてここで問題にしたい。思うに，吉田は古山の書を評するころからかなり変わって来る。

吉田によれば，古山が強く執着しているのは，戦争の空しさ，日本人の愚かさを，徹底して確認する作業であるように思われる。（中略）日本の恥辱であ

ることを，はっきり認識する。あの戦争によって東南アジアの諸国は独立の契機をつかんだとか，それは歴史的な必然であったとか，攻撃は最上の防禦だとか，アメリカにしてやられたとか，どんな自己弁護をしてみても，私（古山）は太平洋戦争を日本の恥さらしだと思っている。日本人はあの戦争で300万人も死者を出したからといって，被害者として戦争の悲惨を語るばかりでなく，加害者として恥辱をかみしめなければならない。（中略）太平洋戦争を通じて，古山が尊敬させられた将校の筆頭は，松江という源氏名の，色も黒く器量もすぐれない慰安婦が子どもを生んだとき，その子の父であることを自認して，負け戦さのなかを逃げ延びながら，その女に出来るだけのことをしてつくした将校である。ここまで古山の文章を引用して，吉田は，「以上，受太刀のしようのないほど，痛烈な指摘ではないか」と感嘆する（吉田 1980，79-81）。

Ⅳ　もう１人の保守主義者

丸山眞男は，鶴見俊輔との対談「普遍的原理の立場」（丸山・鶴見，1967）において，「事実の記録をつくろう」という提言を次のように語る。

丸山　前にも言ったんですが，戦後思想史というのは，だいたい論壇史じゃないか。それはそれとして意味はあるけれども，むしろ事実で，まだ明らかにされていないことを，いまのうちに残しておく必要がある。（中略）あまり整然とした話でなくて，雑駁なる思い出を，たくさん残しておくべきだ。何しろ以前は書きものしか記録として残せなかったけれども，政治家なんかのはあちこちでテープにとっているし，また，ほかにも戦後史として計画的に残しておこうという企画はあるけれどもね。もっと広く戦後には各地にいろんなグループが，簇生したわけでしょう。「思想の科学研究会」もその１つだ。そういうものの記録を，それぞれが残しておくべきだ。

鶴見　「近代文学」なんかはよい記録が残っていますね。

丸山　結束が固いから。そのもっとも対極をなすものは民科（民主主義科学者協会）だな。民科の歩みはわからないことだらけでしょう。私もよく知らない。

鶴見　政治が絡んできますからね。人を中傷したりする，そのスレスレまでいくから，公平な記録をつくろうとする人はかえってひかえちゃうんです。

丸山　しかも，意見と事実が峻別されにくい。とくに，一方からは事実の叙述として書いたことが，相手から見ると，非常に主観的な意見として映る。「思想の科学研究会」なんか，まあ比較的そういうことはないほうかもしれない。意見が分かれても，少なくとも政党が絡まっていないから，いろんな人からヒヤリングをとれば，わかると思う。戦後史論というのは，そういうまだ書かれていない資料の上にのっていないと，めいめい勝手なことばかり言っていることになる。

鶴見　丸山さんの戦争中の軌跡はわりあいにわかるような感じがするんですけどね。戦争中に麻生義輝の哲学史の書評を書かれたことがありましたね。あのなかに，大西祝の評価を書かれていて，歴史主義一本じゃダメだっていう考え方が，そこに出ているということを，丸山さんは指摘されているわけですが，戦争中の歴史主義的な思想の流れが主流だったときに，そういうふうな，いま流れているものと別の流れが，かつてはあって，それが重大なものだということを指摘することをやめない……，そういう意味で，ふだん忘れていて状況に合うことをぽこっと思い出す，その思い出しの論理から，ひじょうに自由な考え方を戦争中にとっておられたような気がするんです。（後略）（鶴見 1996，12-4）。

丸山　戦後でも20余年たちますからね。「戦後」と一括しては言いにくいと思うんです。いまわたしの姿勢を鶴見さんはひじょうに合理化した表現で言われたけれど，単純に言えば，アマノジャクみたいなもんだったと思うんです。もしこのアマノジャク精神の「先生」はだれかと言えば，やっぱり福沢諭吉ですね。むろん戦争中で言えば，ただアマノジャクだけじゃなかった。アマノジャク・プラス・サムシングがあったと思うけれど。それと，もう一つわたしの体質のなかにあったのは，きのういったことと無関係に急に変わったことは言いたくないという気持ち。内的連続性というか，あるいは一種の保守性と言ってもいいかもしれない。変わるにしても，突然変異的な変りかた

はしたくないという気持ち。しいていえば，この２つですね。しかし，それは時期によって，それがわりあい表面に出た時期と，そうでない時期とがある。表面に出た時期は，戦争直後の１，２年ですね，かえって。

鶴見　陸羯南のことを書かれたのは，とても早かったですね。

丸山　ええ。1946年です。あれなんか１つのあらわれで，日本主義や国粋主義もよいところがあるじゃないかという，まあ，単純なアマノジャクですね。（中略）ただ，いまになってこんなことを言うと，ある意味では，いまの時代に迎合することになるんで，気分としては言いたくないんだけれど，あのときの左翼に対する異和感は，つよかったですね。

鶴見　そうですか。わたしには丸山さんのそういう面は，あまり伝わってこなかった。

丸山　戦争直後の時代のあと，第２期が来るんです。レッドパージのころです。わたしはこんなに早く国内状況が変わるとは思わなかった。その点ではあまかったと言われてもしかたがない。そうなってくると，基本的にはアマノジャクなんですけど，その方向が，広く言えば進歩勢力というのか，そういうものと一致するようになってくる。左のほうがだんだん押されはじめたから，なにくそっと思って，アマノジャク精神から言っても左をふくめた民主勢力の肩を持つようになる。正直に言って，全面講和問題あたりを契機にして，コミットしたわけですよ。戦争直後の世相に対して，多少，斜めに見ていた考えかたから，もっと積極的にというか，わるく言えば，現実政治の動向の１つにコミットするようになってきた。「平和問題懇談会」は政治活動をしたわけではないけれど，やはり，レッドパージ，全面講和というのが，１つの転機だったと思うんです。ところが，それからまもなく大病をした。その後の大きな時期は安保ですね。これは，わたしをよく知ってる若い人からひじょうに意外だと言われた。つまり，ぼくはそれまでおよそああいうかたちの政治参加なんかしない人間だとおもわれていたわけです。そこは世間のイメージとひじょうに違うんです。世間では，どうかすると，戦後ずっとインテリゲンチアに号令をかけてきた思想家の１つの型みたいなイメージで

見られている。ところがわたしを知っている人からは，およそどんな意味でも先頭に立ったことをやるのはきらいな，むしろ隠遁家だと思っていたのが，安保のときに，ばかに新聞などに名前が出てきたんで，びっくり仰天したという人がずいぶんいるんです。だから，わたしの心理では，あれは例外なんです。こっちから出ていったというよりは，むしろ向こうから攻撃をかけてきたでしょう。だから，防衛なんですね。さっきの保守と矛盾しないんです。保守なんだ。保守だけど向こうから攻撃かけてきたから，そんなら受けて立とうというだけのことで，とくに積極的にこっちから政治参加したということじゃないんです，わたしの心理では（同，14-8）。

ここで，筆者（土倉）として問題の整理をさせていただきたいのだが，もうひとりの保守義者とは，丸山眞男のことである。第1に，戦争中に麻生義輝の哲学史の書評を書くことで，歴史主義一本じゃダメだっていう考え方が，そこに出ているということを指摘したこと。第2に，1946年に，「陸羯南――人と思想」で日本主義や国粋主義の再評価したこと。第3に，丸山を知っている人からは，およそどんな意味でも先頭に立ったことをやるのはきらいな，むしろ隠遁家だと思われていたこと，などから彼を保守主義者と判定したのである。ただし，レッドパージ，全面講和の情勢のなかで，丸山の思想と行動が変貌したことも認めなければならないことは当然のことである。

ここでは，丸山の「陸羯南――人と思想」（丸山，1947）論文を読み解きながら，戦後直後の丸山の思想に接近してみたい。丸山は「まえがき」で次のように書き始める。名文の熱い書き出しである。

言葉もまたその運命をもつ。日本精神とか国粋とかいう名は，ついさきごろまで，あらゆる価値の源泉であり，すべての主張ないし運動はその名において己れを合理化しようと競っていたのに，いまやそれは無知と蒙昧と誇大妄想のシノニムとして侮蔑と嘲笑のうちに歴史的過去の彼方に遺棄せられようとしている。今日「日本」イデオロギーと封建的反動との結合はほとんどアプリオリであるかにみえる。しかしどのような凶悪な犯罪人も1度は無邪気で健康な少年時代を経てきたように，日本主義の思想と運動も，大正から明治へと遡って

ゆくと，最近の日本型ファシズムの実践と結びついた段階とはいちじるしくちがった，むしろ社会的役割において，対蹠的といいうるほどの進歩性と健康性をもったものにゆき当るのである。明治20年代の日本主義運動がそれであり，その最も輝けるイデオローグの１人がここに叙べようとする陸羯南である（丸山 1995，93）。

丸山によれば，抽象的な理論に関するかぎり，羯南の思想は当時の民権派に比して決してラジカルではなくむしろヨリ保守的ですらあった。口先では羯南よりいさましいことを叫んでいた民権論者は少なくなかったが，そういう連中は後には，仇敵ごとく罵っていた藩閥政治家と平気で手を握ってしまった。それに比べると羯南は抽象的理論で示されたかぎりの進歩性はその儘彼の現実問題に対する批判において保持された。（中略）羯南は軍部勢力の偏狭な独善主義をなによりも憎んだ。明治25年７月，第１次松方内閣の内閣改造が，陸海軍大臣および軍首脳部の反対によって不可能となり総辞職したとき，羯南は直ちに「武臣干政論」をものし，軍部の政治関与を独特の辛辣痛烈な筆致で弾劾するところがあった。（中略）要するに羯南は，いついかなるときでも，現実的要求に彼の原則を従わせたことなく，かえって逆に，一切の党派乃至現実的動向を彼の原則に照らして批判した。われわれは彼において，真の意味でのインデペンデントな新聞記者をみるのである（同，99-102）。

ただし，丸山は，羯南をべた賞めしたわけではない。ちゃんと羯南の歴史的制約を指摘することも忘れない。すなわち，丸山は，次のように指摘する。「むろん，他方において，われわれは羯南の思想に内在する根本的制約に対して目を覆ってはならぬ。彼は封建的保守主義と自己の立場をしばしば峻別したにもかかわらず，彼の所論には単なる封建的伝統を国民的特性の名において温存する役割を果たすような幾多の猥雑物が認められる」（102）。

そうして，丸山は次のように「むすび」に記す。すなわち，羯南の日本主義はナショナリズムとデモクラシーの綜合を意図した。それがいかに不徹底なものであったとはいえ，これは日本の近代化の方向に対する本質的に正しい見透しである。（中略）新聞『日本』は明治憲法発布の日（1889年２月11日）に誕

生した。羯南は2月15日の社説で，「憲法発布後に於ける日本国民の覚悟」と題して次のように論じた。「今成文憲法の文面を見て直ちに実事に行はれ居るが如くに速了し，忽に安心するが如きは吾輩之を大早計と評せざるを得ず。（中略）吁我が国民よ，此大業を成さん為には幾多の嶮峻ありて吾人の目前に横たはることを覚悟せよ。若し其れ剛毅忍耐着々歩を進むるの精神なく，憲法祭の酔，醒むると同時に憲法其物をも忘却するが如きは吾輩の尤取らざる所なり」（105-6）。

ここから丸山が言うことは，まさに丸山の真髄があらわれているように思われる。すなわち，丸山はこう断言する。ここで羯南の述べていることは現在の情勢に言々句々妥当せざるはない。日本国民は羯南の警告にもかかわらず明治憲法に与えられた程度の貧弱な自由すら現実にまもり抜くことができなかった。改正憲法の公布にあたり，われわれは，国民に与えられた諸権利を現実に働くものたらしめ，進んでヨリ高度の自由を獲得するために，よほどの覚悟をもって，これまでに数倍する嶮峻をのりこえて進まなければならぬであろう。まさしく憲法祭に酔っているときではないのである（106）。

さて，時代は下って，1968年10月，政治学者植手通有，明治新聞雑誌研究者西田長寿，丸山眞男3者による「近代日本と陸羯南」という鼎談が雑誌『みすず』に掲載された。1部引用したい。

丸山　『日本』新聞というものは妙なものだな，というのが，私の最初の実感でした。ただ高等学校の頃，長谷川如是閑さんのところに遊びに行くと，直接羯南の話が出た記憶はありませんが，如是閑さんが，いまどき『日本』新聞というとたいへん反動的な響きがするけれど，けっしてそういうものではなかった，ということは言っていましたね。ですから，自分のことはよくわからないのですけれど，羯南や新聞『日本』に興味をもったのは，ひとつには，おそらく自分で意識しない少年時代の環境の影響があったと思います。もうひとつは，これははっきり覚えていますが，戦争中に父が，羯南の，とくに「自由主義如何」を大したものだとしきりにほめていた。現在，自由主義排撃というのが合言葉になっているけれど，日本主義を唱えた羯南があれ

だけ自由主義の歴史的意義というものを高く評価している，しかし一辺倒ではない，自由主義の限界と同時に自由主義が画期的な歴史的意義を持っていること，そして明治維新は自由主義の革命なんだというふうにとらえていて，いまの右翼とは全然違うんだ，ということを親父が言っていたので，「自由主義如何」は非常に印象に残っていたわけです。その頃は，もう研究室に残っていました。昭和18年に，ちょうど岡義武先生が，『国家学会雑誌』の編集主任をやっておられて「近代日本の形成」という特集を計画されたわけです。それに，私も思想史の領域を割当てられて，「国民主義の形成」というテーマで書くことにした。（中略）「国民主義の形成」という論文を書こうとした本来の私の意図は，こういうことでした――つまり福沢は有名な「日本には政府ありてネーションなし」と言い，また国体のことを“ナショナリティ”と言っている。そのときのネーションとかナショナリティというものが，羯南の『日本』における主張や雪嶺などの国粋主義にもどこかでつながっている。

ところが，だんだんたどって明治30年代になりますと，（中略）同じ日本主義でも帝国とか日本国家という言葉がさかんに言われるようになってくる。そこで，『国家学会雑誌』に書こうとしたのは，国民主義から国家主義へという論旨だったわけです。（中略）ところが，これは，『日本政治思想史研究』の「あとがき」（丸山，1995d）にも書きましたけれど，徳川時代のほうから始めたものですから，福沢にも到らないで「前期的国民主義」という仮の名前をつけ尊王攘夷論の変遷を書いたところで，召集令状が来てしまって中絶したわけです［「国民主義の『前期的』形成」（丸山，1995a）］。ですから，戦後の『中央公論』の「陸羯南」（丸山，1947）は実はその続きなんです。（中略）当時の，日本のナショナリズムや明治時代に対するあまりに一括的に否定的な風潮，ちょうど戦時中の風潮を裏返しにしたような風潮に対して，そうばっかりも言えないと反発する単純な動機もありましたけれど……（丸山 1998，209-10）。

西田　羯南は明治17年頃から辞めるまで官報局編輯課の課長をやっていた。編

輯課長という職務をみますと「官報に登載すべきあらゆる事項を整理・按配して，なおかつ印刷を監督する」ということなのです。そうすると，ここでやらされた仕事というのは想像もつかない大きな仕事なわけです。（中略）また，はっきりした事情を明らかにすることはむずかしいですけれども，ボアソナードは相当影響しているのでないでしょうか。というのは，とくに「条約改正論」についてですが，ボアソナードの意見というのがかなり入っているのではないか。ボアソナードの意見によれば，いやしくも外国から日本が干渉を受けることは一応避けたほうがいい，だから井上案は廃棄しろという意見だったように思います。この考え方は陸にも相当大きなものを与えていると思います。また陸の司法省法学校時代にも，ボワソナードは教師であったわけです。

植手　直接には習っていないかもしれないですね。

西田　ですけれども，ボワソナードが教師であった時分に学生であったことは事実です。これは，陸の在官時代のことと思いますが，井上毅がボワソナードの仏文を陸に訳すよう頼んでいますね。案外に接触があったのではないでしょうか。

丸山　植手さんにお聞きしたいのですが，フランスの影響という場合に，フランス革命の反動思想，とくにド・メーストルですね，あれは羯南みずから訳していますけれど，読みはじめたのはいつ頃ですか。

植手　訳が出たのは明治18年です。

丸山　それで，ド・メーストルを読んだ動機とかはどうですか。

植手　前から注意はしているのですが，具体的には全然わからないですね。

丸山　それから，金子堅太郎の有名な話がありますね。時の政府はエドモンド・バークの『フランス革命の省察』を知って欣喜雀躍したわけです。ヨーロッパの思想はみんな自由平等の説かと思ったら，こういう歴史主義的な保守主義もあったのかと。ということで，バークとド・メーストルはもちろん違うけれど，政府のほうではフランス革命に対する一種の反対思想，ルソー的な天賦人権論や人民主権論に対する反対思想みたいなものを一所懸命探し

ていた。そこにド・メーストルが浮かび上ったということは当然考えられるわけです。

丸山　けれども，なんと言ってもド・メーストルは反動思想家でしょう。ド・メーストルは人権なんていう考えは全然認めない。（中略）徹底した鋭い反動思想家であるという点で，羯南がもしド・メーストルをよく読んだら非常に反発を感じるところがあるのではないか。（後略）。

植手　私も以前には羯南がド・メーストルをどうして訳したのか疑問に思っていました。（中略）ド・メーストルから羯南が影響を受けたと考えられる点は，歴史の継続性を強調することと，（中略）理論と実践を区別した啓蒙的自然法思想を抽象的理論主義と非難することで，これも彼の著書『主権原論』のなかで何回もくり返し出て来ます。しかしこの２点だけですと，一般的に保守的思考を学んだということであって，必ずしもド・メーストルからでなく，エドモンド・バークから学んでもいいわけです。（後略）。（同，216–221）。

ここで，上記の鼎談に登場したエドモンド・バークとギュスターヴ・ボアソナードについて付論しておきたい。

まず，バークであるが，政治学者半澤孝麿が研究者に入ろうと志した当時は，ヨーロッパ政治思想史の研究者たちは，天皇制ファシズムの廃墟を乗り越えて日本における近代を建設すべく，自立した個人が理性を行使して自由な同意の上にデモクラティックな国民国家を形成する理論モデル，（中略）に大きな共感と支持を寄せていた。（中略）その背後には，ヘーゲルの歴史哲学に傾倒した若き丸山眞男の近代観の影が色濃く見える。半澤自身の回想によれば，確かに近代政治史理念成立史論は戦後日本で人々に，天皇制神話に代わって拠るべき新しい神話を提供した。だが同時にそれは，衰微，定型化されるという対価を支払わなければならなかったのではないだろうか，と問題提起をしている。半澤の述懐によれば，「バークをやってみてはどうか」と示唆したのも丸山であった（半澤，221；（半澤 2017，220–1；土倉 2021，335–7））ことも重要であろう。乱暴な言い方を許してもらえば，「若き丸山眞男の近代観の影が色濃く見える」

という半澤の見解で，「色濃く」は一面的ではないだろうか。

次に，ギュスターヴ・ボアソナードの影ということについて問題にしてみたい。政治学者三谷太一郎によれば，超国家主義およびファシズムの崩壊によってもたらされた現行日本国憲法の成立は，法学者、法哲学者であった田中耕太郎にとって，自然法思想が体制原理として定着したことを意味した。（中略）田中は，明治年間に日本政府の法律顧問として来日し，立法事業や法学教育を通して日本の近代化に貢献したボアソナードの学問を高く評価した。（中略）自然法思想に基づくボアソナード民法草案は，それ自体意図せざる日本近代批判であったが，田中はその論理を継承し，明確な意図をもって日本近代批判を展開したといえよう（三谷 1988，193-5；土倉 2021，337-8）。

筆者（土倉）は，ひそかに，ボアソナード→田中耕太郎→丸山のつながりを想像しているのだが，とりあえず，商法学者鈴木竹雄が編纂した『田中耕太郎人と業績』（鈴木，1977）に所収されている「座談会」の丸山発言を引用しておきたい。

丸山　よく学問と思想といいますが，もちろん学問の背景には思想がありますけれども，逆に思想は学者の場合でも必ずしもその学問だけに現れるだけではく，あくまで全人格の表現ですね。（中略）どうもぼくは戦時中，いろんな成りゆで二君に仕えるようになって非常に苦しかったこともあるのです。（中略）偉大な思想家というのは自分の精神の内面にポラリテートというか，相反する両極性があって，それがむしろ豊かな創造性の源泉になっている。（中略）田中先生に即していえば，先生の相対主義という点だけではなくて，たとえば学問的関心が一方では，たえず形而上学や「世界の大勢」の方に向い，他方では，ディテールの法技術の問題に向かうというように，いろいろな面に現れています（鈴木 1977，547-51；土倉 2021，338）。

このような丸山の言説は丸山の保守主義的な一面を見せていると思われる。換言すれば，丸山の思想も学問だけでなく人格にも表現されていると，筆者は考えている。

ここで，政治学者荻原隆の丸山・「陸羯南評価」に対する言説を紹介してみ

よう。荻原によれば，陸羯南に対する再評価は丸山の「陸羯南――人と思想――」（丸山，1947）から始まっていることは多言を要すまい，と言う。すなわち，小論ではあるが，丸山による高い評価を契機として羯南研究が進み，全集の編纂もなされていった。戦後における羯南研究そして明治の保守主義研究の端緒としてまことに意義のある論文であった（荻原 2016，16）。

ここまでは，荻原について行けるのだが，次のような言説は首をかしげたくなる。すなわち，荻原によれば，近代の政治思想が国家を利己的個人の集合体であり，だから法によって統制されなければならないと考えるのに対し，羯南のように国家を道徳や感情による結合体と見て，その中心に連綿と続く国体を置く保守主義は本質的に一種の自然主義である。したがって，羯南にすぐれた主体性の部分があるにしても，徂徠や福沢と違って本来的に作為の思想家ではない（同，17）と一足飛びに言われると困るのである。換言すれば，かりそめにも，羯南は明治日本の「インデペンデントな新聞記者」である。「本来的に作為の思想家ではない」とは間違っても言ってはならないのではなかろうか？

政治学者米原謙によれば，羯南は，「現実的政治の弊」と題する『日本の』社説（陸，1989）で，政治には現実主義と理想主義のバランスが必要だと述べて，現実との妥協の危険性を説いているという。（中略）いわゆるマキャベリズムの創始者であるマキャベリ自身も，イタリアの独立を目的とする理想主義の一面あったと羯南は指摘する。すなわち，「現実的外政は成功の美名を博するに進歩的なり。国運の将来を謀るには退歩的なり」（西田・植手1968，191）と現実主義を論難している。これは，条約改正問題で，単に大熊条約案を否定するための口実ではなく，政治に対する羯南の基本姿勢だった（米原 2017，103）。「現実との妥協の危険，性」を説く羯南は，「作為の思想家ではない」とは言えないのではないだろうか。

さて，ここで，丸山の「陸羯南――人と思想」論文を「日本における保守主義の特徴」という文脈において検討してみよう。政治学者五野井郁夫は「日本の保守主義―その思想と系譜」（五野井，2015）という好論文で次のように書いている。

明治の初期に，バークを翻訳したのは，伊藤博文側近の金子堅太郎であった。金子は井上毅らとともに大日本帝国憲法の起草に参画し，皇室典範などの諸法典を整備ののち枢密顧問官を歴任した，「国家保守主義者」の原型ともいえる存在である。その金子が元老院権少書記官時の1881（明治14）年にバークの『フランス革命の省察』と『新ウィッグから旧ウィッグへの上訴』を抄訳した『政治論略』（有隣堂）がある。（中略）保守主義の登場と上からの官製保守主義継受は（中略）1881年の金子による『政治論略』の抄訳に遡ることができるとともに，他方でその普及は，下からの保守主義として政治小説の流行に見て取ることができるだろう。とくに上からの保守主義は憲法体制の整備と議会政治を見据えた先見的なものだった。これはのちに立憲政友会の初代総裁になった伊藤博文が支援した陸奥宗光の漸進主義路線が近代日本政治における保守本流の源流の基底となり，のちに原敬，西園寺公望や牧野伸顕らのような英国流の議会政治を評価し，重臣として天皇を補弼し立憲主義を支える「重臣リベラリズム」へと結実してゆく（五野井 2015，245）。

しかしながら，後に軍国主義者へと転落した徳富蘇峰の「平民主義」が，陸らの動きを「保守反動」と批判している。（中略）この「保守反動」というレッテル貼りの来歴を示しているのは，丸山眞男の以下の指摘であろうと，五野井は丸山の次の言説を引用する，重引になるが厭わず，引用する。

大正末期以降，知的世界にマルクス主義的用語が急速に普及したために，――そうしてマルクス主義の政治的立場からは，保守主義はせいぜい反動に水を割った観念として消極的に位置づけられるにとどまるので，――ますます保守反動という一括した使い方と考え方が定着した（丸山 1957，10；五野井 2015，245）。

五野井は続けて言う。丸山は「日本に保守主義が知的および政治的伝統としてほとんど根付かなかったこと」こそが，「一方進歩『イズム』の風靡に比して進歩勢力の弱さ，他方保守主義なき『保守』勢力の根強さという逆説を生む一因をなしているのだと説いた。ここにおいて保守主義者への外側からのレッテルはりが「保守主義」そのものではなく，「保守」的な雰囲気だけを独り歩

きさせ，丸山が言うところの「保守主義なき『保守』」の生成に拍車をかけることになった（五野井 同，247）。

「保守主義なき『保守』」は名言だと思う。話は飛躍するかもしれないが，これは現在でも，形を変え，品を変えて持ち上がる問題でもあるような気がする。例えば，左右の対立という時，保守派対左派という言い方をする。これは右翼というと極右のことを指すのがジャーナリズムの通例になっていることと関係する。いずれにせよ，日本においては，戦前も戦後も確固とした「保守主義」は存在しないと言っても過言ではない。

V　おわりに

鶴見俊輔も丸山眞男も，普通は，保守主義者とは言われない。俗に言えば，「受け」を狙った暴言であるが，自信があるわけではない。お断りするが，2人とも自由主義者，近代主義者，進歩主義者である。筆者はそれを否定していない。しかしながら，保守主義者と言いたくなるような言説も，体系的ではないとしても，ちらほら見かけないでもない。ひとつだけ，丸山が『思想の科学』を批判した言葉を紹介したい。

丸山　私が思想の科学研究会に参加したのは，民間のアカデミズムをつくるっていうから，それは非常に良いことだ，と思ったからですよ（笑）。ところがだ，型とか形式を蔑視する内容主義になっちゃったから，きびしいシツケの嫌いな方は，イラハイ，イラハイ，ということになった（丸山 1975，108）。

ここに見られる丸山の言い分は，当たり前のことで，保守主義でも何でもない，と言われるかもしれない。しかし，筆者は，保守主義とは政治理論だけをいうのではない。丸山の言うように，思想とは学問だけでなく，人格も関係して来る。同じように，行動様式，発想法なども大きくとらえて，保守的，保守主義と考えるやり方もあると思う。丸山は「学問とは保守である」と考えているのではないかと筆者はこっそり考えている。

さて，保守主義者鶴見と筆者は措定しているが，鶴見の著述には，同じように政治理論を取り立て問題の中心にしない，人物評伝的なものが多い。鶴見は，

吉田満だけでなく，安田武についても熱意を込めて言及している。本来なら，２人を並べて論じたかったのであるが，筆者の時間と能力の関係で果たせなかった。最後に，この場で，ごく簡単に，安田武について触れさせていただきたい。鶴見は次のように回想した。

東京駅に立って上野まで見渡せた1945年３月とは，がらりとかわった1960年代に入って，戦争の記憶の手掛かりはもう東京には存在しない。この風景の中に，丸坊主，ふんどしひとつの裸体の自分をおいてみたいと思った。８月15日に丸坊主なるという提案をうけとめてくれた仲間，安田武，山田宗睦（哲学者）とともに，この儀式を実行して，15年戦争の長さだけつづけた。そのあとは，ひとりが禿げたということもあって，坊主になる表現効果はとぼしくなり，会食のみにして，おなじ儀式をつづけた（鶴見 2002，10）。

鶴見，安田，山田らの世代と，筆者の世代の大きな違いは，戦争体験の有るか無しかである。筆者が物心ついた時には戦争は終っていた。もちろん，戦争の傷跡のような光景は心に刻まれている。しかし，鶴見が書いているものを読む時はいつも戦争体験の重さが著作の隅々に染みていることを感じざるをえない。

鶴見の回想は続く。この会を安田武は，いつも先んじて準備し，理髪店に知らせ，食事の場所を予約した。彼が亡くなって14年，私は１年に何度も彼を思い出す。自分が食べているときが多い。安田は真剣に飯を食べる人だった。これは戦争をくぐったものに共通する性格だろう。（中略）あれはファシズムと反ファシズムの戦争だったか（そうだった），帝国主義間の戦争だったか（その面はあった）について，彼は論ずるところがなかった。彼にとって，あの戦争とは，自分の意志に反して戦場に引き出されたことであり，自分の隣で，（しかも戦争の終結後）仲間が撃たれて殺されたことであり，本国に帰ってみると，自分にとってのただひとりの友人が帰っていないことだった（同，11-2）。

戦場は安田のなかにまぼろしを育てた。それはアジアの解放とか，大東亜共栄圏ではなく，かつてじぶんのなかにあったくらしの型である。（中略）学業途中で学徒出陣にあい，復員後は，２，３の大学に席をおいたが，どれも中途

退学に終わった。その後は，編集者として戦場を転々とし，（中略）その間に多くの学者に会い，その著作を読んで，執筆を頼むうちに，人がらと著作とのつながりにするどい勘をもつようになった。（中略）同時代の学者では，竹内好，丸山眞男に引き寄せられ，しっかりと読んでいた。（同，12-3）。

戦地にいたころ彼のなかに育てたまぼろしが，京都にはあるという思いこみが，終わりまで彼のなかに生きつづけた。（中略）安田は日本文化のなかに残っている型について書き，戦没者の遺族とつきあい，政治党派にしばられない戦争体験の受け継ぎについて書きつづけた。（中略）安田武は保守的な人であり，日常生活の型を重んじた。保守的な人として，戦争を嫌い，戦争についての記憶を保とうとした（同，16-7）。

長い引用はこのあたりで終了したい。結論というほどのものではないが，上記のように，安田は「保守的な人」であり，戦争体験から離れなかった人である。そして，筆者としては，「戦争体験」―「保守主義」において，安田―鶴見―丸山はつながるのではないかと夢想する。ついでに夢想すれば，「平和」とは「保守」なのではないだろうか。

参考文献

植手通有・西田長寿・丸山眞男（1968），「近代日本と陸羯南」，『みすず』，9・10月合併号。

荻原　隆（2016），『日本における保守主義はいかにして可能か――志賀重昂を例に――』，晃洋書房。

粕谷一希（1978），「戦後史の争点について――鶴見俊輔氏への手紙」，『諸君！』，1978年10月号。

五野井郁夫（2015），「日本の保守主義――その思想と系譜」，山崎　望（編），『奇妙なナショナリズムの時代：排外主義に抗して』，岩波書店，233-76頁。

陸　羯南（1889），「現実的政治の弊」，『日本』社説，7月31日。

鈴木竹雄（編）（1977），『田中耕太郎　人と業績』，有斐閣。

鶴見俊輔（1979），「戦後の次の時代が見失ったもの――粕谷一希氏に答える」，『諸君！』，1979年2月号。

――――（1980），『戦争体験：戦後の意味するもの』，ミネルヴァ書房。

――――（1994），「解説：『戦艦大和ノ最期』」，吉田満『戦艦大和ノ最期』，講談社文

芸文庫，179-88頁。
――――（1996），『鶴見俊輔座談　思想とは何だろうか』，晶文社。
――――（2002），『回想の人びと』，潮出版社。
――――（2015），『鶴見俊輔座談　昭和を語る』，晶文社。
土倉莞爾（2021），「［書評］宍戸常寿ほか編著『戦後憲法学の70年を語る』」，『関西大学法学論集』，第71巻第２号，315-59頁。
中島岳志（2015），「解説」，鶴見俊輔，前掲書，284-302頁。
――――（2018），「鶴見俊輔の岩床――『昭和を語る:鶴見俊輔座談』」，――『保守と立憲』，スタンド・ブックス，241-262頁。
西田長寿・植手通有（編）（1969），『陸羯南全集』，第２巻，みすず書房。
半澤孝麿（2017），「回想の『ケンブリッジ学派』――１政治学徒の同時代思想史物語」，『思想』，５月号，206-33頁。
古山高麗雄(1994)，「寡言の人：作家案内――吉田満」，吉田満，前掲書，189-99頁。
丸山眞男（1947），「陸羯南――人と思想」，『中央公論』，２月号。
――――（1957），「反動の概念」，『岩波講座 現代思想Ⅴ 反動の思想』，3-34頁。
――――（1975），「普遍的原理の立場」，『鶴見俊輔　対談，編集　語りつぐ戦後史』（上），講談社文庫，81-109頁。
――――（1995），「国民主義の『前期的』形成」，『丸山眞男集』第２巻，岩波書店。
――――（1995），『丸山眞男集』第３巻，岩波書店。
――――（1995），「『日本政治思想史研究』あとがき」，『丸山眞男集』第５巻，岩波書店。
――――（1998），『丸山眞男座談』第７冊，岩波書店。
丸山眞男・鶴見俊輔（1967），「普遍的原理の立場」，『思想の科学』，５月号。
米原謙（2017），『日本政治思想』［増補版］，ミネルヴァ書房。
吉田満（1973），「臼淵大尉の場合」，『季刊芸術』夏季号。
――――（1974），『鎮魂戦艦大和』，講談社。
――――（1977），『提督伊藤整一の生涯』，文藝春秋社。
――――（1978），「戦後日本に欠落したもの」，中央公論『経営問題』，1978年春季号。
――――（1980）『戦中派の死生観』，文藝春秋社。吉田，前掲書，77-93頁。
――――（1980），「書いても書いても書いても……――古山高麗雄氏の戦中再訪記――」
――――（1994），『戦艦大和ノ最期』，講談社文芸文庫。
――――（1994），「初版あとがき（昭和27年７月）」，吉田（1994），前掲書，166-69頁。
吉田満・鶴見俊輔（1978），「戦後が失ったもの」，『諸君！』，1978年８月号。
――――（1980），――――，鶴見俊輔，前掲書，89-111頁。

――――（2015），――――，鶴見俊輔，前掲書，190-217頁。